

小倉百人一首 暗記支援プリント (上の句と下の句 線結び)

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
わびぬれば 今はと同じ 難波なる	難波濁 短きあしの ふしの間も	住の江の 岸による波 よるさへや	ちはやぶる 神代も聞かず 竜田川	立ち別れ いなばの山の 峰に生ふる	君がため 春の野に出でて 若菜つむ	陸奥の しのぶもぢぢり 誰ゆゑに	筑波嶺の 峰より落つる 男女の川	天つ風 雲の通ひ路 吹き閉ぢよ	わたの原 八十島かけて 漕ぎ出でぬと	これやこの 行くも帰るも 別れては	花の色は うつりにけりな いたづらに	わが庵は 都のたつみ しかぞ住む	天の原 ふりさけ見れば 春日なる	かささぎの 渡せる橋に おく霜の	奥山に 紅葉踏みわけ 鳴く鹿の	田子の浦に うち出でてみれば 白妙の	あしびきの 山鳥の尾の しだり尾の	春過ぎて 夏来にけらし 白妙の	秋の田の かりほの庵の 苫をあらみ
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
乱れそめにし われならなくに	恋ぞつもりて 淵となりぬる	わが衣手に 雪は降りつつ	みをつくしても 逢はむとぞ思ふ	夢の通ひ路 人目よくらむ	からくれなるに 水くくるとは	まつとし聞かば 今帰り来む	をとめの姿 しばしとどめむ	人には告げよ 海人の釣舟	逢はでこの世を 過ぐしてよとや	白きを見れば 夜ぞふけにける	三笠の山に 出でし月かも	声きく時ぞ 秋は悲しき	世をうち山と 人はいふなり	知るも知らぬも 逢坂の関	長ながし夜を ひとりかも寝む	わが身世にふる ながめせしまに	わが衣手は 露にぬれつつ	富士の高嶺に 雪は降りつつ	衣ほすてふ 天の香具山

他プリント



小倉百人一首 暗記支援プリント (上の句と下の句 線結び)

40	忍ぶれど 色に出でにけり わが恋は	●	花ぞ昔の 香にほひける
39	浅茅生の 小野の篠原 忍ぶれど	●	人の命の 惜しくもあるかな
38	忘らるる 身をば思はず 誓ひてし	●	吉野の里に 降れる白雪
37	白露に 風の吹きしく 秋の野は	●	静ず心なく 花の散るらむ
36	夏の夜は また宵ながら 明けぬるを	●	松も昔の 友ならなくに
35	人はいさ 心も知らず ふるさとは	●	あまりてなどか 人の恋しき
34	誰をかも 知る人にせむ 高砂の	●	ものや思ふと 人の問ふまで
33	ひさかたの 光のどけき 春の日に	●	流れもあへぬ 紅葉なりけり
32	山川に 風のかけたる しがらみは	●	雲のいづこに 月宿るらむ
31	朝ぼらけ 有明の月と 見るまでに	●	つらぬきとめぬ 玉ぞ散りける
30	有明の つれなく見えし 別れより	●	置きまどはせる 白菊の花
29	心あてに 折らばや折らむ 初霜の	●	有明の月を 待ち出でつるかな
28	山里は 冬ぞ寂しき まさりける	●	人に知られで くるよしもがな
27	みかの原 わきて流るる 泉川	●	暁ばかり 憂きものはなし
26	小倉山 峰ののみち葉 心あらば	●	わが身ひとつの 秋にはあらねど
25	名にし負はば 逢坂山の さねかつら	●	むべ山風を 嵐と言ふらむ
24	このたびは 幣も取りあへず 手向山	●	人目も草も かれぬと思へば
23	月見れば ちぢにもこそ 悲しけれ	●	いつ見きとてか 恋しかるらむ
22	吹くからに 秋の草木の しをるれば	●	今ひとたびの みゆき待たなむ
21	今来むと 言ひしばかりに 長月の	●	紅葉の錦 神のまにまに

他プリント



小倉百人一首 暗記支援プリント (上の句と下の句 線結び)

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41
大江山 いく野の道の 遠ければ	やすらはで 寝なましものを 小夜更けて	有馬山 猪名の笹原 風吹けば	めぐり逢ひて 見しやそれとも わかぬ間に	あらざらむ この世のほかの 思ひ出に	滝の音は 絶えて久しく なりぬれど	忘れじの 行く末までは かたければ	嘆きつつ ひとり寝る夜の 明くる間は	明けぬれば 暮るるものとは 知りながら	かくとだに えやは伊吹の さしも草	君がため 惜しからざりし 命さへ	みかきもり 衛士のたく火の 夜は燃え	風をいたみ 岩うつ波の おのれのみ	八重むぐら 茂れる宿の 寂しきに	由良のとを 渡る舟人 かぢを絶え	あはれとも いふべき人は 思ほえて	逢ふことの 絶えてしなくは なかなか	逢ひ見ての 後の心に くらぶれば	契りきな かたみに袖を しぼりつつ	恋すてふ わが名はまだき 立ちにけり
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
いでそよ人を 忘れやはする	雲隠れにし 夜半の月かな	今日を限りの 命ともがな	いかに久しき ものとかは知る	なほ恨めしき 朝ぼらけかな	さしも知らじな 燃ゆる思ひを	名こそ流れて なほ聞こえけれ	かたぶくまでの 月を見しかな	まだふみも見ず 天の橋立	今ひとたびの 逢ふこともがな	昔はものを 思はざりけり	人こそ見えね 秋は来にけり	行く方も知らぬ 恋の道かな	人をも身をも 恨みざらまし	末の松山 波越さじとは	長くもがなと 思ひけるかな	人知れずこそ 思ひそめしか	身のいたづらに なりぬべきかな	昼は消えつつ ものをこそ思へ	くだけてものを 思ふころかな

他プリント



小倉百人一首暗記支援プリント（上の句と下の句線結び）

80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	
長 ^{なが} からむ 心 ^{こころ} も知らず 黒 ^{くろみ} 髪の	秋 ^{あき} 風 ^{かぜ} に たなびく雲 ^{くも} の 絶 ^た え間 ^ま より	淡 ^{あわじ} 路 ^{しま} 島 通 ^{かよ} ふ千 ^ち 鳥 ^{どり} の 鳴 ^な く声 ^{こゑ} に	瀬 ^せ を早 ^{はや} み 岩 ^{いわ} にせかるる 滝 ^た 川の	わたの原 ^{はら} 漕 ^こ ぎ出 ^{いで} でて見 ^み れば ひさかたの	契 ^{ちぎ} りおきし させもが露 ^{つゆ} を 命 ^{いのち} にて	憂 ^{うれ} かりける 人 ^{ひと} を初 ^{はつ} 瀬 ^せ の 山 ^{やま} おろしよ	高 ^{たか} 砂 ^さ の 尾 ^お の上 ^え の桜 ^{ざくら} 咲 ^さ きにけり	音 ^{おと} に聞 ^き く 高 ^{たか} 師 ^し の浜 ^{はま} の あだ波 ^{なみ} は	夕 ^{ゆう} されば 門 ^{かど} 田 ^た の稲 ^{いな} 葉 ^ば おとづれて	寂 ^{さび} しさに 宿 ^{やど} を立 ^た ち出 ^{いで} て ながむれば	嵐 ^{あらし} 吹 ^ふ く 三 ^{みつ} 室 ^{むろ} の山 ^{やま} の もみぢ葉 ^は は	心 ^{こころ} にも あらず憂 ^{うれ} き世 ^よ に ながらへば	春 ^{はる} の夜 ^よ 夢 ^{ゆめ} ばかりなる 手 ^た 枕 ^{まくら} に	もろともに あはれと思 ^{おも} へ 山 ^{やま} 桜 ^{くら}	恨 ^{うら} みわび ほぎぬ袖 ^{そで} だに あるものを	朝 ^{あさ} ぼらけ 宇 ^う 治 ^じ の川 ^{かわ} 霧 ^{きり} たえたえに	今 ^{いま} はただ 思 ^{おも} ひ絶 ^{いた} えなむ とばかりを	夜 ^よ をこめて 鳥 ^{とり} の空 ^{そら} 音 ^ね は はかるとも	いにしへの 奈 ^{なら} 良 ^{みやこ} の都 ^こ の 八 ^や 重 ^{えくら} 桜 ^ら	か ^か ひなく立 ^た たむ 名 ^な こそ惜 ^お しけれ
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
● 幾 ^{いく} 夜 ^よ 寝 ^ね 覚 ^め ぬ 須 ^{すま} 磨 ^ま の関 ^{せき} 守 ^{もり}	● 外 ^と 山 ^{やま} の霞 ^{かすみ} 立 ^た たずもあらなむ	● 激 ^{はげ} しかれとは 祈 ^{いの} らぬものを	● あはれ今年 ^{ことし} の 秋 ^{あき} もいぬめり	● かけじや袖 ^{そで} の ぬれもこそすれ	● 蘆 ^{あし} のまろやに 秋 ^{あき} 風 ^{かぜ} ぞ吹 ^ふ く	● 雲 ^{くも} 居 ^い にまがふ 沖 ^{おき} つ白 ^{しろ} 波 ^{なみ}	● われても未 ^{すえ} に 逢 ^あ わんぞ思 ^{おも} ふ	● 乱 ^{みだ} れて今 ^け 朝 ^さ は ものをこそ思 ^{おも} へ	● もれ出 ^い づる月 ^{つき} の 影 ^{かげ} のさやけさ	● あらはれわたる 瀬 ^せ 々 ^せ の網 ^{あじろ} 代 ^ぞ 木 ^ぎ	● 恋 ^{こい} しかるべき 夜 ^よ 半 ^わ の月 ^{つき} かな	● 人 ^{ひと} づてならで 言 ^い ふよしもがな	● 竜 ^{たつた} 田 ^た の川 ^{かわ} の 錦 ^{にしき} なりけり	● けふ九重 ^{このえ} に にほひぬるかな	● よに逢 ^あ い坂 ^{さか} の 関 ^{せき} は許 ^{ゆる} さじ	● 花 ^{はな} よりほかに 知 ^し る人 ^{ひと} もなし	● いづこも同 ^{おな} じ 秋 ^{あき} の夕 ^{ゆう} 暮 ^ぐ れ	● 恋 ^{こい} に朽 ^く ちなむ 名 ^な こそ惜 ^お しけれ	●	

他プリント



小倉百人一首暗記支援プリント（上の句と下の句線結び）

100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81
ももしきや 古き軒端の しのぶにも	人もをし 人も恨めし あぢきなく	風そよぐ ならの小川の 夕暮れは	来ぬ人を まつほの浦の 夕なぎに	花さそふ 嵐の庭の 雪ならで	おほけなく 憂き世の民に おほふかな	み吉野の 山の秋風 小夜ふけて	世の中は 常にもがもな 渚漕ぐ	わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の	きりぎりす 鳴くや霜夜の さむしろに	見せばやな 雄島のあまの 袖だにも	玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば	難波江の 蘆のかりねの ひとよゆゑ	村雨の 露もまだひぬ 槇の葉に	嘆けとて 月やは物を 思はする	夜もすがら 物思ふころは 明けやらぬ	長らへば またこのごろや しのばれむ	世の中よ 道こそなけれ 思ひ入る	思ひわび さても命は あるものを	ほととぎす 鳴きつる方を ながむれば
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
みそぎぞ夏の しるしなりける	ふるさと寒く 衣打つなり	わが立つ杉に 墨染めの袖	衣片敷き ひとりかも寝む	人こそ知らね 乾く間もなし	海人の小舟の 綱手かなしも	なほあまりある 昔なりけり	焼くや藻塩の 身もこがれつつ	世を思ふゆゑに もの思ふ身は	ふりゆくものは わが身なりけり	みをつくしてや 恋ひわたるべき	かこち顔なる わが涙かな	閨のひまさへ つれなかりけり	憂しと見し世ぞ 今は恋しき	ただ有明の 月ぞ残れる	憂きに堪へぬは 涙なりけり	忍ぶることの 弱りもぞする	霧立ちのぼる 秋の夕暮れ	濡れにぞ濡れし 色はかはらず	山の奥にも 鹿ぞ鳴くなる

他プリント

